



ぼんたと かんた

していいことや、しないほうがいい
ことを まよったことは、あるかな。



1
よいことを
すすんでする



ぼんたとかんたは、なかよしです。

いつもいっしょに あそんでいます。

「うら山で、ひみつきちを見つけたんだ。

ふたり
二人で行こうよ。」

かんたが、ぼんたをさそいました。

「だめだよ。うら山はあぶないから、

入ってはいけないと、言われているよ。」

「平気、平気。」

かんたは、ずんずん 歩いていきます。

「ぼくも、うら山であそびたいな——」。

ぼんたは、しばらく まよっていました。

でも、思い切って、大きな声で

言いました。

「ぼくは、行かないよ。」

それを聞いて、かんたが あわてて

もどってきました。

「ぼんた、どうしたんだい。」

「ぼくは、行かない。」

よく考えて きめたんだ。

だって、うら山はあぶないから。」

ぼんたは、はっきりと言いました。

かんたは、だまって 考えていました。



そして、きっぱりと言いました。

「ぼくも、行かない。自分で

考えて きめた。」

二人は、にっこりわらって

うなずきました。

もんぶかがくしょう 原作 ◆ きたむらじん 絵

5



かんがえよう・はなしあおう



よくないことを しないためには、どうすれば よいのでしょうか。



● ずんずん 歩いていく かんたを見て、ぽんたは、どんな気もちに なったでしょうか。

◎ ぽんたは、どうして 「ぼくは、行かないよ。」と 言ったのでしょうか。

● 自分で考えて きめたことは、ありますか。
それは、どんなことですか。



ぐみの木と小鳥

こまっている人がいたら、
あなたは、どうするかな。



6
ちかくの人に
やさしくする

山の上に ぐみの木が 立っていました。

ある日のこと、一羽の小鳥が やって来て、

ぐみのみを おいしそうに食べました。ぐみの木は、

そのようすを 見ているうちに、友だちのりすを

思い出して言いました。

「友だちのりすさんが、このごろ少しも すがたを

見せないのです。」

「それではぼくが、ようすを見に 行ってきましょう。」

小鳥が、ぐみのみをもって りすの家に 来てみると、りすは、びょうきで

ねていました。

「ぐみの木さんに たのまれて、ぐみのみを もってきました。ぐみの木さんは、

あなたのことを 心ばいしていましたよ。」

「小鳥さん、ありがとう。ぐみの木さんに ありがとうと つたえてください。」

りすは、ぐみのみを 食べてみました。なんともいえない よいあじが、

口の中に広がり、少し 力が出てきたように 思われました。

つぎの日も、小鳥は、ぐみのみを くわえて、

りすのところへ とんできました。

「体のぐあいは どうですか。」

りすは、なみだを目にかべて、言いました。

「おかげで、だいぶ よくなりました。」

しばらくして、小鳥は、

「りすさん、では、また あしたね。」

と言うと、とび立っていきました。



そのつぎの日、小鳥は、あらしの音で

目をさましました。ぐみの木は言いました。

「小鳥さん、りすさんのところに行くのは、

あらしがやんでからに してくださいね。」

しかし、あらしは やみそうもありません。

小鳥は、じっと 考えていましたが、やがて、

ぐみのみを くわえると、とび立っていきました。

はげしい 雨と風が 小鳥の羽に 当たって、

今にも 地めにたたきつけられそうです。

しかし、小鳥は 力をふりしぼって

とびつづけました。

やっとの思いで りすのところに 小鳥がたどりつくくと、りすは、

「こんな あらしの中を、よく来てくださいました。ありがとうございます。もうすぐ、

ぐみの木さんに 会えそうです。」

と言いました。

朝になると、あらしはやみました。

小鳥は、ぐみの木のところへ

いそぎました。ぐみの木は、話を聞くと、

「りすさんは、もう だいじょうぶで

しょう。小鳥さんが してくれたことは、

いつまでもわすれません。」

と言いました。やがて、小鳥は、

ぐみの木に わかれをつけて、

とびさりました。

へんしゅういんかい文 ◆うえだ いずみ 絵



かんがえよう・はなしあおう

親切にしたり、されたりすると、
どんな気もちになるでしょう。

●やみそうもない あらしの中で、
小鳥は、どんなことを
じっと 考えていたでしょう。

●友だちや、まわりの人に
親切にしたとき、
どんな気もちになりましたか。

●この後、りすが、小鳥に手紙を
書きました。あなたも、
りすになったつもりで 書きましょう。

つなげよう

一年生の子が ないているのを 見たら、
あなたは、どんなことが できるかな。





「ようこそ、菅島へ！」

君が住んでいる地域の
じまんは、何かな。



17
国やきょう土の
伝統を
大切に

「ようこそ、菅島へ！」

子どもたちの大きな声が、港にひびきます。船を降りると、元気いっぱいの子もたちが、観光客一人一人に明るくあいさつをしながら出むかえてくれます。

菅島は、三重県鳥羽市の鳥羽湾にうかぶ小さな島です。

この島にある菅島小学校は、全校児童わずか十数名の小さな学校です。この学校では年に数回、島をおとずれる人に児童全員で観光ガイドツアーを行っています。

島外の人に、自分たちの暮らす島のみりよくを、子どもたち自身で伝えられるようにと始まったのが、このガイドツアーです。

観光客を出むかえる児童



菅島灯台



「はじめまして。ぼくは、菅島小学校六年の植木順平といいます。ぼくがこの島でいちばん好きな建物は、菅島灯台です。灯台は、後でぼくがごしうかいます。今日は、よろしくお願ひします。」

順平は、菅島の好きなどころを島に来てくれた人に伝えたいと思い、菅島の文化や自然について、自分で調べたり、大人にきいたりして、春からガイドの準備をしてきました。ガイド用の原こうは、プロのガイドさんからアドバイスをもらって、完成させました。そして今日、いよいよ本番をおかえたのです。

「みなさん、これが菅島灯台です。現在も使われているれんが造りの灯台の中で、日本一古い灯台といわれていて、約百五十年の歴史があります。イギリス人のリチャードIIヘンリーIIブラントンによって設計され、一八七三年、明治六年に完成しました。灯台が完成したときには、西郷隆盛も見に来たといわれています。」
順平が菅島灯台をしようかすると、
「れんが造りで、日本一古い灯台だって、すごい！」



菅島から望む伊勢湾（港へもどる道から見た景色）

「へええ！ そんなに長い歴史があるの。」

と、お客さんから口々におどろきの声が上がりました。

順平は、とたんに胸がくすぐったいような、ほこらしい気持ちになりました。順平も、菅島灯台に古い歴史があったと知ったときは、同じようにおどろきました。そのとき、いつも見慣れていた灯台がちがって見えてきたのを思い出しました。

菅島灯台からは、白髭神社やしろんご浜をしようかいしながら港へもどります。港へもどる道からは、美しい景色を見ることができます。順平は、タイミングを見計らってお客さんに声をかけました。

「みなさん、後ろをふり向いてみてください。」

順平のかけ声とともに、お客さんがいっせいにふり向きました。

「わあ。すごい、きれい！」

「空の青と海の青がとけ合って、なんともいえない美しさだね。」

お客さんたちがかん声を上げると、次々にカメラで景色をとり始めました。すると、その中の一人が、順平の方を向いて話しかけてきました。

「さすが島っ子！ いい場所を知っているね。」

「ありがとうございます。実は、ガイドの準備をされていて発見したんです。」

「へえ。ガイドがきっかけになったんだね。」

「はい。何度も歩くうちに、だんだん好きになってきて——。今では島の中で、いちばんお気に入りの景色です。だから、みなさんに見てほしいと思って。」

「島の中で、いちばん？」

「はい。ぼくの大切な場所です。」

そのお客さんは、順平の顔をじっと見ると、順平さんの大切な場所を教えてください、ありがとう。」

と言って、にっこりほえみました。

「ありがとうございます。また来るからね。」

お客さんたちが口々に、手をふりながら船に乗りこんでいきます。

子どもたちも、お客さんたちに、元気いっ



観光客を見送る児童

ばい手をふり返します。

順平も、両手で元気に手をふりました。

お年寄りから子どもまで、みんなが生き生きしていること、海産物がおいしいこと、それから、

それから——。手をふり

ながら、島の伝えたいことが後から後からあふれてきます。

順平は、次はどんなこ

とをしようかいいしようかなど、考え始めました。

編集委員会 作

考えよう・話し合おう

郷土を大切にすることについて、考えよう。

● 順平は、どんなことを考えながらガイドをしているのでしょうか。

○ 順平は、どうして島の伝えたいことが後から後からあふれてきたのでしょうか。

● 自分の生まれた所や住んでいる地域のよさやみりよきは、どんなところだと思いますか。

つなげよう

日本をおとすれた外国の人に、自分の住んでいる地域や日本のよさ、伝統や文化をしようかいいするなら、どんなところをしようかいいしたい？



わ特

